新島襄の墓碑と同志社人

萩原俊彦

一

一九八六年六月のある日、新島襄の墓碑が、こともあろうに同志社大学大成寮寮生によって破壊された。その詳細はマスコミによって広く報道された。同志社の管理責任者からも伝えられた。

私はその内容を知るたびに、ただ唖然とするのみであった。自己本位で享楽主義に徹した「新人類」が同志社にも侵入してきたかの観がした。退廃した時代を感ぜずにはおられない。しかし、それ以上に、同志社教育の荒廃を見せつけられてしまった。「七〇年」紛争以来今日に至るまで、同志社大学は如何なる努力をして「真正の自由」を誇り得る学園に復興したのであろうか。あるいは、新島襄の人と思想に学び「同志社百年の計」いな、「二百年の長期計画」を実現すべく、あらゆる努力を重ねてきたのだろうか。甚だ疑わしいようだ。此の度のような事件は、新島精神を捨てた現在の同志社なるがゆえに発生したものであり、たとえ時代の波が押し寄せようとも、確固とした私学主義に立脚している早稲田大学や慶応義塾に於ては、断じて発生するものではないことを申しておこう。

新島襄の愛と不屈の精神に共鳴し、同志社にかかわった人々にとって、若王子山頂の墓地は、あまりにも「聖なる

奥津城」であった。同志社に働き、学ぶ喜びも、誇りも、ここに詣ることにより倍化したはずである。墓前で祈れば、新島との霊的な対話が可能であり、多くの教えを受けたと語る同志社人もいた。清水安三氏は、その代表的な人物であろう。清水氏は桜美林学園の教学・経営問題で悩むと入洛して新島の墓地に詣り、教えを受けて帰京することがしばしばあったと語っていた。

私たちが在学した頃ともなると、授業料値上げ反対のスローガンのもと、学友会の幹部が墓前でハンガーストライキを決行したこともあった。「六〇年」安保阻止闘争が高揚すると、宮本栄三氏（現宇都宮大学教授、当時は院生）が、全同志社総決起集会で「若王子山頂墓地より新島先生がよみがえられ、この戦いの先頭に立つであろう」と訴え、万雷の拍手を浴びたこともあった。いくたの想いが交錯するが、いずれにせよ、若王子畔新島の墓地は、同志社の学生・生徒・社員・校友等々が、良心の証しをたてた場所であり、「愛と正義」の精神で、心を一つに結ぶ連帯の場でもあった。こうした意味深い墓地に詣でることにより、私たちは「真正の同志社人」＝新島の子たる資格を与えられるものと思っていた。

二

明治・大正期の同志社人も、新島襄の墓地に参詣したことであろう。あるときは、公式行事の一環として、ときには個人で、それに学生が組織行な行動をおこしたときにも、墓参をしたに相違ない。

しかし、同志社の公式行事として墓参、特に早天祈禱会が始められたのはいつ頃のことであろうか。

まず、召天記念日についてみていこう。この日のために、同志社が主催した行事らしきものとして、公会堂（チャ

ペル）を主会場にした記念会をあげられよう。その模様を記載した明治二十七年一月二十七日付山岡邦三郎日記の一部をここに紹介しよう。その当時、伊勢津教会の牧師をしていた山岡は早朝同地を出発、同志社の会合に出席する。

新島先生の記念会へ例せん為めに、……略……本日午前四時発の汽車に乗して京都に向ふ、寒気甚たしくして、足の指先切るが如く感したり。京都に於てはケレー氏方に立寄りて手荷物を預け置きて同志社公堂に開かれる記念会に例す。司会は湯浅治郎氏にして、大嶋正健、下村孝太郎の両氏、演説せられたり、下村氏は、偽善を去て真面目ならさるへからざる事を述べたり。会議の後、旧交を会語し、正午には立食の饗応を受けたり、食堂は庭内に幔を張りて仮説せられ、料理は鹿飯にして前の土曜日に学生が猟し得たるものなりと云ふ、本日最も多く耳にしたる語は、同志社の特質を発揮すべしと云ふにありて

この日の記念会は湯浅治郎が司会、大嶋正健、下村孝太郎の両氏が講師として、「記念演説をしている様子が記されている。その後の昼食会では、学生の手になる鹿飯を食べながら、同志社の将来を模索するための議論が交わされているようだ。それゆえ、新島の召天記念日は、社員・学生・校友の協力のもとに催され、新島を偲び語りつつ、その理想としたものを継承し、同志社教育の未来を論じ合うよき一日であった。

新島の召天記念日はその後も開かれたようだ。原田助が同志社総長を辞任した大正八年一月は、彼の召天三十三年にあたっていた。同月二十日発行の朝日新聞（大阪）を見ると、原田の労をねぎらうと共に、夫の想いにふける未亡人八重の談話が記載してある。一部をここに紹介しよう。

……略……十二年の長い年月を社長として同志社の為に尽して下さった原田さんのご苦心に妾は深く感謝して居ります。……略……襄の生きている当時でさえ騒動がよく起ったものですから、今日の同志社は非常に大きくなって居ります。総長としてのご苦心も又格別であったことと存じます。……略……早いものですね。もう襄がゆ

きましてから三十三年目です。一月の二十三日は丁度其の命日に当りますので、同志社の公会堂で門下の人々が記念会を催して下さるそうです。

新島襄の門下生は、想い出深い師の三十三回召天記念日のことゆえに、卒先してこの日の集会を企画したのであろう。

なお、従来から、安中、神戸など各地に在住する校友、組合キリスト教会会員も、記念行事を催してきた。同志社公会堂の集会は、それらと比較しても一段と盛大なものであったろう。ただ、各地の集会に墓参が伴わぬのは当然としても、同志社公会堂の召天記念集会に際しては、若王子墓地で早天祈禱会を催してきたのであろうか。山岡邦三郎日記や朝日新聞の新島八重談話にも、このことに関する記録が全くない。もしも、召天記念日に集会のみがなされ、墓参が行われなかったとすれば、そのことをどう理解すべきであろうか。現在のところ、適当な手がかりが得られない。ただ、当時のプロテスタント信仰にもとづく「召天記念日」観、墓地観によるものとしか申しようがない。一体、召天記念日の早天祈禱会は、いつ、誰れによって、しかも如何なる動機と新島観によって始められ、同志社の公式行事として「定着」していったのであろうか。是非教えて頂きたいものである。

さて、同志社創立記念日の早天祈禱会は、比較的古くから催されたことである。但し、横井や小崎が社長をしていた頃の史料は私の手許にない。この日のことを記しているのは原田助の日記である。原田は明治四十年に社長（総長）就任、以後大正八年、その職を辞任するまでの間、同志社のために貢献、明治四十五年には同志社大学の開学にこぎつけるなどの功績をあげている。彼は、ときには一人で墓参をしたり、八重を旧邸に訪ねるなど、新島に対する敬意を表わしていた。

さらに、社長就任後間もなく、彼は、旧師の願いである大学設立の計画を練り始めるのであった。その気運が次第

に高まりつつある明治四十年十一月二十九日、第三十三回創立記念日に、原田は早天祈禱会を催した。その模様は、同日付の原田日記に、次のように記してある。

同志社創立第三十三回記念日、早天祈禱会を若王子山頭に開く。会する者二百二十名。新島先生未亡人と予、感話す。予は我々の内真に其決心あらば必ず先生の志を得んと語る（原田助遺集一六〇―一六一頁）

原田の感話は大変意味ありげなもののようである。「先生（新島）の志しを得」ようとは、大学設立について、決断のほどを示したのであろう。年末の日記にも彼は「来年は同志社大学設立の計画を建てることを期したし」と記しておるので、このように彼の心の内を理解してよいであろう。してみると、この日の早天祈禱会は、大学設立の計画、準備が順調に進展しうる様に祈った、きわめて重大な行事であったと考えられる。

原田日記には、明治四十四年、第三十六回創立記念日の早天祈禱会についても記述がある。ここにそれを紹介しよう。

十二月二十九日、三十六回、創立記念日、午前六時若王子山頭の先生の墓前に於て祈禱会を開く。集る者二百数十名、予は墓前に立ち同志社大学設立決定を報告す。既往を懐ひ、将来を憶ふて涙を禁ず能はず（原田助遺集一九一頁）

原田は新島の墓前で大学設立・翌年開学決定の報告をしているようであり、喜びに満ちた彼の心境が記されているようだ。まさにこの日の祈禱会は、同志社大学発達史のうえで、また、そのための努力を重ねてきた原田の人生にとっても、きわめて意義深いものであった。

ところが、この翌年、創立記念日当日の原田日記をみると、早天祈禱会に関する記述が全くない。ただ、同志社公会堂に於ける大学開学記念会の模様が記されているだけである。もしこの日の早朝、若王子畔の新島墓地で祈禱会が催されていたのであれば、果して原田が自分の日記に書き落すであろうか。したがって、この日、早天祈禱会はなさ

れなかったと推測できるであろう。残念なのは、原田が社長（総長）在職中に、この催しがどのようにしてなされ、同志社の年間公式行事として定着したのか否か、彼の日記等々では知り得ないことである。

それにしても、原田助が、同志社大学設立を決断したり、開学決定の報告をするなど、創立記念日の早天祈禱会は、同志社教育史上に於て、あまりにも重大な出来事の発生したことを知らせるための催しであったことを再度強調しておきたい。

三

若王子畔新島襄の墓地に詣るのは、公式行事のときと限られたわけではない。新島を常に尊敬し、襄の子・孫であるとの自覚をもっていた人ならば、ときには個人で、あるいは数人のグループで墓参にでかけたこともあろう。新島襄の召天以来九十有余年、この間に、果して何人ほどの墓参参加者がいたことであろうか。また、その人たちは、何のため、如何なる気持を胸に秘めて若王子畔に立ったことであろう。今後、墓参参加者の手記、感想文がまとめられれば幸いである。ここでは大嶋正健、原田助の墓参について記したい。

大嶋正健は、札幌滞在中の新島夫妻の世話をしたことがあり、また新島の配慮で按手礼を受け、独立教会の牧師を勤めていた。そのうえ大嶋は、同志社で教鞭をとることも内諾していたのである。その約束を履行するため、彼は十七年間働いてきた札幌農学校と独立教会を辞任して、明治二十六年十月「（新島）先生が宿る同志社に骨を埋むる覚悟」（大嶋正健著「クラーク先生るその弟子たち」二三八頁）で着仕したのであった。そのときの、悲壮感を漂せた心境は「泣いて袖にすがる教え子を振り切り、神召し給う新戦場、洛陽の地に向う」（大嶋正健著「クラーク先生と

その弟子たち」二三八頁）との一文に端的に記されている。

それゆえ、旅装をとかずに大嶋が、まず出向いたところこそ、若王子畔の新島墓地であった。そのときの模様は、彼の回顧談「クラーク先生とその弟子たち」に次のように記している。

私が、およそ第一にぬかずいたのは、松嵐花のあと訪う東山若王子山頭勝海舟の筆跡もあざやかな『新島襄の墓』の五文字が泛び出ている先生のおくつきの前であった。

そして

秋風北地温容　　為我嘗開星斗胸
偉業遺蹤人已逝　　断腸相国寺辺鐘

の追悼の詩を捧げた。（同書二三八頁）

墓地の周辺は、すでに風致地区と称すにふさわしい景観をそなえつつあったようだ。松嵐のもとで、大嶋はどれほど熱い祈りを捧げたことであろうか。ましてや、同志社普通学校で教鞭をとることの重大さ、教育責任を通感したことであろう。その意味で、彼は同志社人として生きるべく、誓いの祈りを捧げたものといってよい。

原田助日記を読むと、個人で墓参をしたときの記録が二箇所ある。ここにそれを紹介しよう。

明治三十年、一月三日、新島先生の墓に詣で、時艱に際して偉人を憶ふ、先生の性格中最も著しかりしは天の摂理を信ずるの心厚かりしことなり、先生の愛国心、信仰、忍耐、謙遜、嗚呼（原田助遺集九五頁）

明治四十年、一月九日、独り若王子山頭新島先生初め諸先輩の墓に詣ふて、感慨転た切なり。先生の墓側に献身の祈を捧げて帰る。午后、予の歓迎会、公会堂に開かるゝ……略……協同一致して本校の為に尽さむと欲す。（原田助遺集一五七頁）

さきの日記は、原田が平安教会牧師在職中のものである。その頃の彼は、公私共に平安な日々を送っていたのであろうか。それとも、牧会生活に疑問をいだき、苦悩に満ちた生活の渦中にあったのであろうか。いずれにせよ、新島から貪欲なまでに、人格、思想、信仰を学びとろうとしているようだ。

明治四十年の日記は、同志社社長就任歓迎会当日の記録である。原田は、新島夫妻、山本覚馬を始め、同志社関係者の墓参を行い、社長（総長）として献身することの誓いをしたのであろう。したがって、彼の心境は、大嶋正健と共通するものであったと考えてよい。

以上、二人の事例を紹介したのみであるが、新島襄を尊敬して止まぬ同志社人が、如何なる思いや決意、願いを込めて、若王子畔に参り、墓前で祈りを捧げてきたかを知られよう。同志社に職を得、新島の遺志を継いで働くことは、二人の人生にとって、まさに祝福されるべき一大事であった。そのようなときに、あるいは人生で苦悩し、煩悶をしたときに、同志社人は、墓前に詣で、新島より霊的な教えを受けようとしていたのではないか。

してみると、新島襄の身体は朽ちはてても、その魂はいつまでも生き、若王子畔で、同志社人のあしどりを見つめ、トーラーとして働いていたのではないか。それゆえに、新島襄の墓地は、つねに、同志社精神の中核的な存在であった。また墓碑はその精神を象徴するものであったといえよう。

四

同志社は新島襄の在世中から騒動が発生した学園であった。しかも、学生が、組織的な行動に立ち上ったとき、若王子畔の新島の墓地に詣ることもあった。そこで学生は、祈りを捧げて正義を主張し、霊的な励ましを新島から受け

ると共に、学生同志の結束を固めようとしたのであろう。

まさに、こうした行為を伴うことが、同志社に於ける理想的な学生運動であり、他私学には見られぬ特色であり、同志社人の誇りとするものであった。

一例を「原田騒動」にみよう。但し、紙数の教合上、騒動の内容を説明することは、一切を省略する。原田総長の進退に関し、校友会の一部の支部や、理事会で意見が対立し、その内容が大学全般に伝えられると、全学生は行動をおこした。彼らは、しばしば学生大会を開き、総長の留任決議をするなど、活発な行動を展開した。特に、大正七年十二月十九日、総長擁護を叫ぶ学生運動は最高調に達した。学生大会の開催はもとより、原田・新島邸前での万才三唱、デモンストレーションを兼ねての墓参など、その動きには活気がみなぎっていた。大正七年十二月二十日付朝日新聞は、その日の模様を詳しく報道している。

ここに、その記事を紹介しよう。なおその一部は紙数の都合上割愛した。

理事会遂に原田総長の留任を決議す。示威運動に成功したる学生団。校旗を掲げて練り歩く（以上、見出し）

夕刊既報、十九日の京都同志社理事会は、午後引続き事務室楼上に開催、協議を凝したるが、階下の事務室には理事会の結果如何と憂慮せる職員等百余名ストーブを囲みて固唾を呑む。

一方学生大会は、午後二時焚出しの握飯に腹を肥やし、三時再び開会するや、七百の学生の前に起ちて、母校の前途を憂ふるもの、校友団の暴戻を攻撃するもの、理事会の無能を罵倒するもの等昂奮せる学生の血を叫ぶが如き絶叫の声は、熱狂の度を加へ、果は同志社の校旗を持ち出し赤き小旗を振り……略……此に学生は帽子を振りて校歌を合唱し、勇を鼓す。五時に至り、理事会投票の結果は、『原田総長の辞表を返戻し再考を求む』と大多数にて一決し了りぬ。……略……学生団は、天にも響けとときの声を挙げて幾度も幾度も総長万才を歓呼し、四

辺を震憾せしめぬ。示威運動効を奏せる学生一同は、校旗を先頭に、高張提灯に松火をかざして原田総長邸に至りて万才を唱へ、更に転じて洛東若王子山上なる故新島襄氏の碑前に到り、熱誠を披瀝し、下って木屋町丸太町上ル新島未亡人邸前にて又も万才を三唱し、九時散会せり。……略……

大正デモクラシイの時代思想にも支えられた学生の運動は、このようなたかまりを見せたが、翌年一月原田助は辞任、学生もその理由を納得し、騒動に終止符を打った。一年有余にわたり、学生はよく運動を展開し、大学のありかたを模索し続けてきた。しかも、学生は、騒動が激化し、彼らの運動が頂点に達したとき、集団で墓参を実行したのであった。その行動は、きわめて整然となされ、しかも迫力に富んだものであったろう。これこそが、同志社に根ざすべき「真正な学生運動」であり、学生のなすべき「真の校祖墓参」であろう。若王子畔新島襄の墓地は、自由にして活達な学生にとっても、聖なる奥津城であった。そこに詣でて始めて、同志社に学ぶ者の喜びも、誇りも、責任感も強化することができ、「新島の子」として、友情と連帯のきずなを強めることになったのではないだろうか。

五

新島襄の召天以来すでに九十余年、その間に、多数の同志社人が若王子畔新島の墓地に詣でてきた。人々は、様々な願いや思いを胸に秘めて山に登り、祈りを捧げたことであろう。長きにわたり、墓前で不謹慎な行為をすることなどは、全くなかった。そのよき伝統が破られ、墓碑が破壊されたことは、同志社教育の堕落を意味するものでしかない。

新島の墓地、なかんずくその墓碑は、無言のうちに同志社人の行為をみつめ、しかも、無言で「良心」とは何かと

問いかけてきた。九十有余年の風雪に耐え、苔むし始めた墓碑には、同志社に生き、新島と共に生きてきた人々の喜びも悲しみも、全てが浸透している。それゆえにこれからも、私たちは、新島の墓地を守り、あの墓碑を大事に生かし、同志社精神の復興の為めに役立てたいものと思っている。単なる古文化財にしてはならない。

（はぎわら　としひこ・同志社香里中高教諭）